

平成30年度第2回第5地区卒後教育講座アンケート結果

アンケート回答施設地区別件数

第1地区	7
第2地区	8
第3地区	8
第4地区	4
第5地区	7
茨城県	1
合計	35

CT・MRIそれぞれ別に回答していただいた施設が3施設あり、アンケート回収件数は38件でした。

N0	アンケート内容
	CT・MRI造影検査時の対応で下記について教えてください。
1	飲食の制限はしていますか？
2	している場合、食事を摂ってしまった場合どう説明していますか？また、どのような対応をしていますか。
3	造影検査において同意書等を使用していますか？
4	している場合同意書を忘れてしまった場合どのような対応をしていますか
5	検査直前に造影剤を使用したくないと言われた場合どうしていますか？
	下記の質問を患者さんから受けた場合、あなたの施設ではどのように回答しているか教えてください。
6	造影剤って何ですか？
7	水分摂取はアルコールでも大丈夫ですか？
8	造影剤を使用した後に授乳しても大丈夫ですか？
9	造影CTの時に点滴をするのはなぜですか？
10	CT とMRIの造影剤は違うのですか？
11	造影剤を使用した日はお酒を飲んでも大丈夫ですか？
12	造影剤はどれだけ入れても大丈夫？
13	造影剤を使うとどうして熱くなるの？
14	造影剤を使用して検査をしますが、どんな目的で使用するのですか？
	下記の被ばくに関する質問を患者さんから受けた場合、あなたの施設ではどのように回答しているか教えてください。
15	先生やスタッフは防護衣を着ているのに、なぜ患者には着せてくれないのか
16	検査の被ばくでがんになりますか？

17	放射線の影響が子供や孫に遺伝することはないですか？
18	妊娠前の放射線検査で不妊の心配はないですか？
19	妊娠中に放射線検査を受けてしまいましたが、お腹の赤ちゃんに影響はありますか？中絶の心配はありますか？
20	子供が放射線検査を受けました。影響はないでしょうか？
21	短期間に何回も検査を受けて大丈夫ですか？
	その他、よく受ける質問等ございましたら、回答例も併せてご記入お願いいたします。また、日常業務の中で、患者さんへの説明で困っている項目や、他の施設ではどのように答えているか聞いてみたいものがあればなんでも書いてください。

Q.1 飲食の制限はしていますか？

あり 29件

なし 3件

一部 6件

放射線科として食事制限をしているのは、MRCPの検査のみ。主治医により独自に食事制限している場合がある。

造影CTの場合、撮影3時間前まで飲食可。水分は制限なし。

MRIの場合、MRCPのみ 撮影3時間前まで禁飲食

MRU、MRCPはしている。

Q.2 している場合、食事を摂ってしまった場合どう説明していますか？また、どのような対応をしていますか。

- ・ 食後3時間経過するまで待機
- ・ 検査時に嘔吐の恐れがあります。又、正しく検査できない可能性がありますと説明し、医師に検査を行うか、時間を遅らせて行うか確認する。又中止にして後日にするか確認する
- ・ 食事の時間から時間調整をする。又は後日食事を摂らないで検査をするようにする
- ・ 医師に報告し、検査が中止になる場合は医師から説明
- ・ 今回はキャンセルになります。もう一度しっかり説明して再来院していただいています。
- ・ 中止又は半日待つ又はそのまま撮影
- ・ 検査で見たい部位の障害になったり、造影剤の副作用により嘔吐してしまった場合、胃の中の食べ物が気管につまり窒息するリスクがあります。
結果説明まで時間があれば検査日を変更。無ければ主治医やその診療科の医師に相談して少なくとも4時間は時間をあけて検査を行います。
- ・ 主治医の判断で対応
- ・ 腹部検査の場合、残渣や収縮の影響、副作用等で嘔吐し気管に入ってしまう事もあり安全性が確保できない為、3～4時間(食後)あくまでお待ちいただくか後日に変更したりしている
- ・ 救急は施行。基本はDrの指示で対応している。その他は3時間程度待つ。

- ・副作用が出た場合、処置に影響が出るため、また、腹部などは画像に影響が出るためお待ちいただきます。食事を摂った時は2時間待つて頂く対応をしています。
- ・食後3時間待つてもらっている。
受付で対応(消化するのに3時間かかるので、待つてください)
- ・食後4時間になるまで病院内で待つてもらい撮影している。
- ・副作用の際、嘔吐してしまうことが問題となることを説明。原則食後3時間空けるように時間をずらす。しかし当日の外来診察の場合、検査結果説明がある場合もあるため、医師に確認し指示によりそのまま行うこともある。胆道系の検査は5時間程度空けるようにしている。
- ・可能であれば時間を空けて(CTでは3～4時間、MRIではMRCPの場合は3～4時間おく。それ以外ではそのまま施行することが多い)
- ・主治医の判断で当日(時間をあけて検査)又は後日(予約とりなおし)
- ・本人には検査できないことがある旨を伝え主治医の判断にて行う
- ・食事から4時間経過してから行う。待てない場合は後日検査。
食事を摂ると胆のうが収縮し観察しにくくなる。また、副作用で嘔吐してしまった場合、嘔吐物誤嚥による窒息や肺炎を引き起こす可能性があり、これを防ぐため食事制限している。
- ・胃、腸内の食物により「良い画像が撮影できない」、「胆のうが収縮する」など、読影の妨げや誤診につながる事を説明。再度食事しない状態で来院して頂きます。緊急時には医師に確認しそのまま撮影する場合があります。
- ・胃や腸の蠕動運動が画像に影響してしまう可能性があるため食後約3時間ぐらい待ちます。都合悪い時や急ぐときは主治医確認します。
※当院では上腹部のMRIのみ食事制限しています。
- ・腹部検査の場合、胆のうの収縮や腸の蠕動により画像に影響してしまう。また、万が一造影剤の副作用で嘔吐してしまった時に気管に入ってしまうと危険。
担当医に相談し検査日を変更してもらう。
- ・被検者に「原則的に飲食後の造影検査は避けるべき」である旨説明する。指示医に報告し検査の続行か中止かについて改めて指示を得る。
- ・胃に内容物があると副作用発現の際に吐物を詰まらせたり誤嚥の危険があること、飲食によって見えにくくなる臓器がある事を伝える。指示医の指示に従う。多くは時間を空けるor延期。単純のみ撮る。
- ・誤嚥の恐れがあるので、食事から3時間空けてから検査。待つてもらう
- ・食事制限の必要性について説明し、時間があれば最終飲食より3時間程度時間を空けて検査をする。もしくは予約変更
- ・本人が待てる場合なら時間をあけるようにする。待てないようなら、主治医に確認して、撮影をして良いかの指示を仰ぐ。ダメなようなら、撮影日時を変更する。
- ・ケースバイケース
- ・嘔吐による誤嚥を防止するため食後3時間以内の造影検査は避けております。緊急で行う場合は安全を期するため担当医の同行のうで行っています。
- ・緊急の場合は医師に確認。通常は患者の都合、各科相談の上食事から3時間経過するまで待つていただく。
- ・食事をとってしまう事で胆のうが小さくなってしまう。胃に食物がある事で画像が見にくくなってしまう事がある。食事を摂った時間から3時間空けてから検査をするのが望ましい

- ・造影剤の副作用に嘔吐があり、万が一食後にCTを撮って嘔吐した場合誤嚥性肺炎となるリスクがあります。そのために検査前3時間の絶食とさせて頂いてます。患者の都合がOKなら食事から2.5～3時間後に撮影する。放射線医師に報告して部位によっては食後3時間待たなくても検査行う事もある。
- ・きれいな画像を撮るために食後時間を空けたいので、〇時〇分以降の検査になります。ご協力願えますか？

Q.3 造影検査において同意書等を使用していますか？

あり 38件

なし 0件

Q.4 している場合同意書を忘れてしまった場合どのような対応をしていますか

- ・新たに同意書発行し記入
- ・検査直前に同意書をとりますので自宅に忘れることはありません。
- ・同意書をとっていたが忘れてしまった場合、その場で患者に新しい同意書に署名してもらい当日中に依頼医又は依頼科の医師に署名をもらう
同意書をとっていない場合、放射線科又は依頼医もしくは依頼科の医師に説明してもらい同意を得る。
- ・外来に戻し担当医から説明、同意を取ってもらう
- ・再度同意書に記入して頂き、当日分を使用している。
- ・外来に戻して再作成し、放射線科に戻ってもらう。
- ・予約時に取得しているため忘れるという問題はない。
- ・各科外来等に対応してもらう(CTでは再記入してもらう)
現場で看護師を呼び説明してもらい、もう一度書いてもらう(MRI)
- ・当日、もう一度本人又は家族に書いてもらう。
- ・可能な限り検査前に本人に確認してから書面作成後に検査している。事故など救急搬送では電話で家族に同意。無理なら同意なしの場合もあります。(単純のみにする)
- ・各科外来等にて再度同意書を書いてもらっています。
- ・担当医に相談し再度同意書を記入してもらう
- ・医事課を通して同意書の再発行を行い、被検者に再度記入していただく。
- ・その場で記入してもらう。本人が難しい場合は家族に口頭で同意を得る。
- ・仮の同意書を作成し、次回診察の時に持参してもらう。
- ・基本的に忘れない。なければ依頼医に連絡しとってもらう。事後の場合もあり(Dr判断)
- ・必ず署名してもらってから施行する。
- ・再度、記入していただく。無理なら依頼医に検査に同行してもらう。
- ・各科や病棟にあれば持ってきてもらう。緊急の場合は医師に連絡。
- ・依頼科に確認して同意書を書いてなかった場合はその場で書いてもらうようお願いする。
- ・医師から造影剤の説明がされていれば、受付で再発行する。されていなければ依頼科に戻って説明を受けてもらう。
- ・医師から造影剤の説明がされていれば、放射線科で再発行の手続きをする。されていない場合は依頼科に説明、再発行を依頼している。

- ・ 同意書なしでの実施は想定していません。

Q.5 検査直前に造影剤を使用したくないと言われた場合どうしていますか？

- ・ 主治医に連絡し単純で良ければ単純、造影したければ主治医に説得してもらう
- ・ 医師に話し、中止にするか判断を委ねる。
検査を続ける場合は医師に検査の有用性について説明していただく。
- ・ 担当医と相談する。
- ・ 造影剤の説明をして、どうしてもしたくないと言われたら医師に相談する。
- ・ 医師が対応
- ・ しっかり医師から説明をしていますが、無理にはしていません。
- ・ 医師に判断してもらい使用しないで検査することもある。
- ・ 主治医又はかかっている診療科の医師に連絡し中止とする。無理はしない。主治医がどうしても造影してほしいという場合は患者に説明してもらう
- ・ 造影剤の有用性を再度説明し、納得していただければ続行できなければDrに確認、判断をしていただく。
- ・ 同意書を確認しながら造影剤の必要性を説明し、それでも納得してもらえなかったら依頼医に連絡
- ・ 同意書が「いいえ」の場合、患者の意思を尊重。
- ・ 今まで例がないが、担当医に診察してもらう。医師不在の時はカルテに記入して、また診察に来てもらう。
- ・ 医師へ報告し診察。
- ・ CT:主治医に連絡をして患者の意思を伝え中止か説得かの判断してもらう
MRI:本人の意思に従い単純のみとしている(各科には連絡をしてから)
- ・ 指示医に電話で相談。医師により患者に説明。
- ・ アレルギー歴など造影剤を使いたくないという方は非造影で確認します。MRIなど造影なしでもよい画像が得られる装置があるので、他の病院に紹介することもあります。外来医師が説明する事が多いです。
- ・ 依頼医又は主治医に連絡。再度ICをしてもらって、同意を得られれば続行。得られなければ単純のみ又は中止とする。
- ・ 検査を一旦中止し、被検者の訴えを指示医に報告し(被検者に再度診察を受けていただくよう対応する)指示を仰ぐ
- ・ こちらで判断できないことを伝え、理由を聞き主治医、指示医へ確認
- ・ 主治医に電話連絡。患者と主治医で決定する(中止、単純、造影)。診察してもらうこともある。
- ・ 依頼科にて対応していただく。
- ・ 主治医に相談又は外来(入院)にて主治医に対応してもらう。
- ・ 依頼医に対応していただく。不在なら放射線科医に対応していただく。
- ・ 同意書を提示のもと患者さんと意思を再確認しそれでもやりたくなければ各科、医師に確認
- ・ 依頼医にその状況を伝え、どのように対応すればよいのか確認する。
- ・ 放射線科医師に報告して単純にするか検査を受けないか指示を受ける。放射線科医師の説明で造影剤使用することもある。

- ・理由を聞き、看護師、検査担当医師で対応するか、担当医へ報告、対応依頼する。どうしても拒否の場合は依頼科医師へ放射線医師が連絡し造影拒否のことを伝え、指示を仰ぐ。
- 検査自体をキャンセルします。その説明は放射線科医師より
- ・同意なしで実施しません。医師に差し戻します。

Q.6 造影剤ってなんですか？

- ・CTやMRIでは普通に撮影したのでは分からない血液の流れや、臓器にどのくらい血液が流れ込んでいるかを分かるようにするための薬です。
- ・血管や臓器が正常であるか分かりやすくするお薬。又、悪い箇所を見つけやすくするお薬と説明
- ・写真を見やすくするものです
- ・検査をより詳しくするための薬剤です
- ・詳しい検査をする為のお薬です。主に臓器や血管を一時的に染めます。
- ・このお薬を血管から注入すると腫瘍や血流、尿路が見やすくなり正確な診断につながります。
- ・病気を見やすくする薬です。より詳しく検査するために使います。
- ・目的部位をより分かりやすくする物です。
- ・検査を行う上でより詳細な情報(診断に重要な情報)を得るために使用するお薬です。
- ・X線撮影をする際、目的とする臓器のX線透過性を変え臓器の位置、形状、病的変化などを明瞭に描出することを目的とした物質です。
- ・検査をより分かりやすくするために用いる薬剤です。
- ・検査の情報を増やすために画像にコントラストをつける薬です。血管から入れて検査を行うものになります。腎臓に問題がなければ大体24時間以内にほとんどの薬が尿として排出されます。
- ・より詳しい検査を行うために必要な薬剤です。
- ・血管や各臓器の血液の流れや病気の進行や炎症などの広がりをより診断しやすくするお薬です。
- ・血管や臓器が写る薬です。
- ・血管の中に入って血液を白く染める事によって病気がわかる薬です。
- ・体の中をよく見えるようにするために使用します。腫瘍や血管がよく見えるようにするために使用します。
- ・CT:レントゲンに写る特殊な液体です。
MRI:撮影部位をきれいに撮影しより診断しやすくするお薬です。
- ・各臓器や病変をより鮮明に確認する事ができる静脈注射薬です。
- ・体内や血管を見やすくするお薬です。
- ・静脈に注射し、全身の血管や臓器に分布させる薬剤です。これにより病気の性質や血管や臓器が鮮明に描出されます。病気の状態をより正確にするために用いられます。
- ・身体の組織を画像化する場合、正常か異常かを区別して撮影する必要があります。その為に体に害の少ない造影剤というものを使います。バリウム(消化管)、ヨード造影剤(血管など)空気などがあります。
- ・画像診断の為の薬剤です。造影剤を血管の静脈から注入し血流にのって全身へと運ばれ画像上白と黒の濃度の変化を示し病変部の情報をより正確に把握することが出来ます。
- ・正常臓器と病変を区別する為に血管に注射する薬です。

- ・ 撮影領域の各組織の濃度(信号強度)を上げたり、あるいは下げたりし、組織間のコントラストを高めるために用いる薬剤です。
- ・ 検査の為のお薬でコントラストをつけて病気を検出したり血管の状態を明瞭にして診断精度を高めるためのものです。
- ・ ヨードやガドリニウムを含む薬で、病変や血管が診やすくなる。
- ・ 血管(静脈)に注射をして血管や臓器を見やすくする薬剤です。
- ・ 画像診断の為のお薬です。造影剤を静脈から注入すると血流に乗って全身へと運ばれて行きます。血管や、血管の富んだ炎症・腫瘍部分があればそこにより多くの造影剤が集まり、非造影では見えなかったものが所見として現れてきます。造影検査は画像コントラストを生み出し、多くの情報を引き出すことが可能です。
- ・ 画像がよりわかりやすくする薬剤です。
- ・ 病気がわかりやすくなるお薬です。
- ・ 画像診断のためのお薬、主に静脈から注入して血液の中で全身に運ばれて単純CT(MRI)でわかりづらい病気もよく見えてきます。
- ・ 検査を行った時見たい部分が良く見えるようにする薬です。ごくまれに吐き気やかゆみを訴えられる方もいます。
- ・ 情報量をより多くし見やすくするための薬。
- ・ お体に何か悪い所がないか、より見つけやすくするために使うお薬です。
- ・ 体の異常をわかりやすくするための薬剤です。
- ・ 画像の写りを良くするものです。
画像に写るので分かりやすくなります。
- ・ 血管に色をつける薬剤です。

Q.7 水分摂取はアルコールでも大丈夫ですか

- ・ アルコールは体内で分解される際、水が必要となるので、アルコールを飲んでしまうと逆に脱水症状となってしまうので、極力控えて下さい。
- ・ ダメです。水分は水又はお茶にしてください。
- ・ アルコールはほどほどで、水、お茶を多めにとってください(検査後)
水分は水、お茶にしてください(検査前)
- ・ ジュース、スープ、アルコールは不可です。
- ・ 大丈夫です。
- ・ できれば控えていただき、スポーツドリンク等を摂っていただきたい。と伝えます。
- ・ ダメです。(どんな場合でもお酒はお勧めしません)
- ・ 水かお茶でお願いします。
- ・ アルコールには利尿作用があり、体の中の状態が脱水状態に近づきます。その状態で検査を行うと副作用が起きやすくなったり、副作用が起きても症状は気づかない、あるいは副作用が起きた場合重篤化する恐れがありますのでアルコールはダメです。急性腎障害を引き起こすリスクも高まってしまいます。
- ・ アルコールは脱水を起こします。万が一造影剤による副作用が起きた場合、脱水状態ではより強く副作用がでる恐れがあります。検査当日のアルコールは控えて下さい。
- ・ 担当医へ聞いて下さい。
- ・ アルコールは利尿作用が強く、むしろ水分を排出してしまうので控えて下さい。

- ・ 基本NGです。
- ・ アルコールは脱水になるため、アルコールは飲まないで下さい。
- ・ ダメです。
- ・ アルコールを飲むとアレルギーでじんましんが出た時に血流が良くなって、肺の中にも広がり呼吸できなくなる等、重要な副作用になるかもしれないので、止めて下さい。
- ・ アルコールはだめ。
- ・ できるだけお茶かお水をお願いします。
- ・ 前: アルコールや乳製品、ジュース等を避け水かお茶を飲んで下さいと説明
後: 過度のアルコールは避けてください。
- ・ アルコールはダメです。アルコールだと脱水を助長する恐れがあるからです。
- ・ 検査当日のアルコールの摂取は控えてください。アルコールを飲むと脱水になりやすく、水分摂取にはなりません。
- ・ なぜ水分摂取するかというと、体内に入った造影剤を素早く体外に出す為です。アルコールは肝臓、脳などに影響があり、本来の目的と別の作用があるので、水やお茶にして下さい。
運転して来院される方へ: 水分摂取は検査後できるだけ早くすることで遅発性副作用がやわらぎます。院内での水分摂取が効果的です。トイレが近くなるので、運転に注意して
- ・ こちら側(医療者側)からは積極的に摂って下さいとは言えませんが、いつも通りの生活で大丈夫です。造影剤排泄の為の水分摂取であれば水やお茶、清涼飲料水等が好ましいです。アルコールは利尿作用がある為、血液中の造影剤濃度が上がる可能性があるため、過度の飲酒は控えて下さい。
- ・ アルコールは脱水症状を引き起こす場合があるので、水やお茶などで水分摂取をお願いします。
- ・ アルコール以外のスポーツドリンクなどの水分摂取をお勧めします。
- ・ アルコール以外をお願いします。(アルコールにて脱水になりやすいので)
- ・ 検査後はアルコール以外の水分を多めに飲むように説明している。
- ・ 造影検査前に水分補給を行う方が水分補給をしない場合に比べ、副作用の発現率が減少します。アルコールは脱水をきたしますので控えて下さい。
- ・ アルコールは脱水になることが多いので、水または、お茶などにしてください
- ・ 水かお茶などを飲んでください。
- ・ ダメ
- ・ アルコールでは水分が出ていくことが多いと思います。水分を取りやすい水やスポーツ飲料をお勧めします。
- ・ アルコールは脱水を引き起こすので控えてもらってお茶や水をお願いします。
- ・ 水またはお茶を勧める。
- ・ ダメとは言いませんが、飲酒のみでなく、それ以上に水分摂取するように説明しています。
- ・ 利尿を促すため、水、お茶、スポーツドリンクを勧めています。
- ・ ダメです。

Q.8 造影剤を使用した後に授乳しても大丈夫ですか

- ・ CTヨード系、MRIマグネスコープ、ボースデル: 検査後48時間は授乳を避けて下さい。
- ・ MRI(ガドビスト、EOB): 検査後24時間は授乳を避けて下さい。

- ・造影剤を使用した日は授乳は控えて下さい
- ・MRの場合24時間、CTの場合48時間授乳を控えてください。
- ・検査後48時間から大丈夫です。
- ・造影剤注入後1日経ってから授乳してください。と伝えます。
- ・大丈夫と言われていますが、心配であれば2～3日ほど控えてもよいと思います。
- ・医師と相談して下さい。
- ・CT:検査後48時間は中止して下さい。
MRI:検査後24時間は中止して下さい。
- ・造影剤使用後48時間は授乳を避けて下さい。(検査前に説明し48時間断乳できる方のみ実施します。)
- ・48時間後から
- ・造影剤は母乳中にも移行するため、CTでは48時間、MRIでは24時間中断して頂き搾乳を行って下さい。
- ・授乳中断は不要との意見もありますが、当院では原則2日間の中断をお願いしています。
- ・母乳に造影剤が残ってしまう可能性があるため、48時間は授乳しないようにしてください。
- ・3日あけてから授乳してください。
- ・原則48時間避けるように。無理な場合は1回の授乳を避けて2回目以降が望ましい。
- ・可能であれば24時間以内の授乳は避けていただきたいです。
- ・投与後24時間は授乳を避けてください。
- ・大丈夫です。造影剤が母乳に入る事はありません。
- ・CT,MRIどちらの造影剤も母乳を介して赤ちゃんに移行する量は極めて微量です。造影剤は赤ちゃんの検査に一般的に使われており、その量に比べ母乳から移行する量は五十分の一以下であり安全です。しかし、移行させないためにCTでは48時間、MRIでは24時間授乳しないことをお勧めします。
- ・造影検査後、少なからず乳汁中に造影剤が移行することがわかっております。よって、検査後24～48時間は授乳を禁止する事がよろしいです。バリウム(消化管用)はOKです。
- ・造影剤を使用すると母乳への移行が確認されている為、造影検査後48時間は搾乳、廃乳が好ましいです。
※ヨード、ボースデル:48時間。EOB、ガドリニウム:24時間
- ・検査後24時間は母乳に造影剤が含まれてしまう為、授乳を停止し、それ以降授乳するようして下さい。
- ・2日間ほど控えてもらえれば大丈夫です。ただ、アメリカでは小児学会で安全とされているので、お子様がどうしても大変でしたら授乳してもよいと思いますよ。
- ・乳汁へ移行する可能性がありますので、検査後48時間は授乳を控えて下さい。
- ・造影剤がわずかに母乳に混ざるので、2日間は授乳をしないでもらう
- ・投与後48時間は授乳を行わないようにして頂いている
- ・主治医にご確認ください。ご心配の場合はあらかじめ2日程度分の搾乳をしていただき授乳して下さい。造影後48時間程度の搾乳したものは破棄して下さい。
- ・撮影後、48時間は授乳をしないでください。できれば、その間、搾乳をしてください。

- ・ CT48時間、MRI24時間待ってもらう
- ・ 24時間は止めている
- ・ 安全を考えて48時間控えていただいております
- ・ 可能であれば3日ぐらい授乳を避けることをお勧めします。
- ・ 2日間は授乳を控えるように勧めます。
- ・ 母乳の中に造影剤が排泄されるため、造影剤使用後48時間は断乳してもらう
- ・ 造影剤使用後24時間は断乳して下さい。

Q.9 造影CTの時に点滴するのはなぜですか

- ・ 造影剤は体に作用することなく尿として排泄されますので、その手助けをするために点滴をします。さらに前もって点滴をすることで検査がスムーズに行えます。
- ・ 造影剤が体に流れやすくするためです。又は腎臓の負担を少なくするためです。副作用が出たり、バイタルが低下した時にいち早く薬を投与するためです。
- ・ 造影剤を尿として体外に出すためです。
- ・ 造影剤の薬を腎臓から尿として排出するためです。
- ・ 血管の確保をして、そこから造影剤を入れますが、造影剤はタイミングを計って注入するため、一時的に生理食塩水を通しておきます。又、造影剤アレルギー反応が出現した場合、このルートから治療用の薬剤を投与するためです。
- ・ 血管を確保するためです。ここから造影剤を注入します。アレルギーの反応が出た時には速やかにお薬を注射します。
- ・ ①事前に点滴して造影剤を流すルートを探っておくことにより検査時間を短くできたり、造影剤が皮下にもれるリスクを少なくすることができます。又、急変時はそのルートを使用して適切な薬剤をすぐ使用できるという利点もあります。
②腎臓の機能を補うためです。
- ・ 造影剤が確実に血管内に投与される事を確認するために点滴を行います。また、副作用が起きてしまった際すみやかに補液を行う為でもあります。
- ・ 薬がちゃんと入るかの確認です。
- ・ 水分補給のため？ 当院では検査前に水分摂取しているので、点滴はしていません
- ・ 当院は前室がないためCT室内でルート確保し抜針するので、ルート確保していません
- ・ 当院ではハイドレーションは行っているが、造影CTのためには点滴は入れていない
- ・ 副作用が起きた時に点滴をしていれば、アレルギーに対応するお薬を速やかに血液内に入れる事ができます。
- ・ 腎機能が低下しているため。造影剤は尿排泄のため。
- ・ 体に対する負荷を柔らげるために補水したり、万が一副作用が出ても直ぐに対応ができるようにです。
- ・ 検査中何かあった場合に対応しやすくするためです。また、検査後の造影剤の排泄をうながすためです。
- ・ 造影剤の副作用に早急に対応するためです。
- ・ 造影剤による腎機能の低下を防ぐために行います。(腎機能低下患者のみ点滴を行う)
- ・ 検査前に漏れのないよう確実なルート確保が必要なので、生食による点滴をします。さらに検査中に副作用などの異常が出た場合には点滴のラインから薬剤を注入し、治療を行います。

- ・点滴をするのは造影剤は血管から注入する為です。また、副作用の出現があった時に素早く対応できるようにする目的もあります。
- ・検査中に副作用などが出た時に素早く処置を行えるようにする為です。
- ・注入された造影剤が早期に排泄されるようウォッシュアウトの目的で点滴を実施します。
- ・実施していない
- ・造影剤の排出を促し、腎臓の負担軽減、副作用の低減のため。
- ・当院では点滴を行っていません
- ・造影剤を血管から入れるのにルートをとるためと腎臓の機能が低い場合、脱水の状態だと造影剤が尿として、排泄されにくい場合があります。尿を出しやすくし、早く排泄されるような効果や腎臓を保護する効果があります。造影剤の副作用を低減する効果もあります。
- ・造影剤を使用するための血管を確保するためと、造影後のアレルギー出現時に速やかに対応するためです。
- ・薬を入れるため(説明しながらルートをとるので、聞かれたことはない)
- ・なるべく早く体外に造影剤を尿と一緒に出すため。
- ・造影剤を入れるためには事前に針を刺しておく必要があります。そのため生理食塩水を使った点滴をしてそれから造影となります。また、点滴に使用する生理食塩水自体も水分補給となるため副作用を軽減することが期待できます。
- ・もし副作用が起きてしまったときの対応のため。
ルート確保によってスムーズに検査を行い、刺入部の凝血を防ぐため。
- ・造影剤を入れるためのルートを確保する為と、検査後に体の中の造影剤を点滴で薄めるためです。
- ・基本していません。腎機能が悪い方はハイドレーションをする。造影剤による腎臓の負担を軽減させるためです。
- ・造影剤を使用するための血管を確保として点滴を入れさせて頂きます。造影剤は尿として排出する為、尿を出やすくするために点滴をします。
- ・ルートの確保と補液のためです。

Q.10 CTとMRIの造影剤は違うのですか

- ・違います。CTはヨードという成分でMRIではガドリニウムという成分が主に用いられています。それぞれ撮影に合った成分で作られており用法用量も違います。おおよそMRIの造影剤はCTの10分の一の量となっています。
- ・違います。CTはヨード系の造影剤でMRIではガドリニウム系の造影剤を使用しています。
- ・装置が違うので、薬も違います。
- ・違います。
- ・CTの造影剤はヨードが含有されているお薬で、MRI造影剤はガドリニウム金属が含有されているお薬で、まったく異なるものです。
- ・違う薬です。
- ・違います。
- ・CTの造影剤はヨードを主成分であり、MRIの造影剤はガドリニウムが主成分となっています。名前や使用目的はほぼ同じですが中身は違うものです。
- ・同じではありません。疾患によって使い分けをしています。
- ・違うものもありますが、用途としては同じです。

- ・ 違います。
- ・ 目的はほぼ同じですが、成分が違います。
- ・ 違います。
- ・ 違います。
- ・ 成分が全く違い、CTはヨード系、MRIは鉄を使用しています。
- ・ 違います。
- ・ CT:成分や使う量をだいぶ違います。
MRI:違います。
- ・ 成分から全く異なるものです。
- ・ 違います。成分が違うので各検査に有用なものを使用しています。
- ・ CTはX線、MRIは電磁波により撮影するため違う薬剤を用います。
- ・ CT用造影剤はヨード性です。X線が透過しにくいので造影剤が取り込まれると白く写ります。MRI用造影剤はガドリニウム、鉄などの製剤があり、撮影法により使い分けします。使用後は早く排泄させるため水分を多めに飲んで尿を出すようにして下さい。
- ・ 違います。CTはヨード製剤といわれるX線をよく吸収してくれるお薬です。MRIは鉄やガドリニウム製剤といわれる金属の一種を使用します。
- ・ 造影剤に含まれる成分が違います。
- ・ 違います。CTでは水溶性ヨード造影剤を、MRI検査ではガドリニウムキレート剤を使用します。
- ・ 成分が違います。CTはX線、MRIは磁石と電波で画像を作ります。各々に応じた薬となっています。
- ・ CTはヨードを含む、MRIはガドリニウムを含む薬で目的は同じでも作用が違う。
- ・ 当院ではMRI装置がないので造影剤は違うとだけのみお話している。
- ・ CTはヨード造影剤、MRIはガドリニウム造影剤です。薬の中に入っている成分に違いがあります。
- ・ 違います。CTは放射線を使った検査でMRIは磁気を使った検査です。なので、造影剤自体の成分が違います。
- ・ 違いますよ。
- ・ ヨード造影剤(CT)、ガドリニウム金属(MRI)
- ・ 体に作用する方法と使用する量が違っています。
- ・ 違います。CTはヨード系、MRIはガドリニウム系です。ヨード系の方が副作用が出やすいです。
- ・ CTの場合は造影剤を入れる時、お体が熱く感じますが、MRIの時は少し冷たく感じる事があります。
量もCTとMRIでは違ってMRIの方がCTよりも少ない量で検査をします。
- ・ CTの造影剤は体が熱くなります。MRIは熱くなりません。CTの方が造影剤の量が多いです。
- ・ 成分が異なるため違います。
- ・ 違います。

Q.11 造影剤を使用した日はお酒をのんでも大丈夫ですか

- ・造影剤を早めに体の外に排出するために点滴や水分摂取をするのに、お酒を飲んでしまうと、アルコールを分解するのに水分が使われてしまい、排出に時間がかかってしまうので、極力控えて下さい
- ・大丈夫です。ただし大量に飲むのは控えて下さい。
- ・お酒を飲むことは門
- ・たしなむ程度に大丈夫です。
- ・大丈夫です。
- ・できればアルコール以外の水分を摂っていただいて造影剤をお体から排出して下さい。
- ・水をたくさん飲んでください。お酒は控えてください。
- ・大丈夫です。
- ・アルコールには利尿作用があり体の中の状態が脱水状態に近づくため使用当日はお酒は控えて下さい。脱水状態だと造影剤の副作用が起こりやすくなる可能性があります。
- ・アルコールは脱水を起こします。脱水は副作用の症状を重くします。検査当日のアルコールは控えて下さい。
- ・大丈夫です。
- ・アルコールは控えて下さい。造影剤を排出させるために水分摂取をお願いします。
- ・控えてもらっています。
- ・脱水になる可能性があるため出来れば飲まないでください。
- ・ダメです。水、お茶などの水分にしてください。
- ・アルコールを飲むとアレルギーでじんましんが出た時に血流が良くなって、肺の中にも広がり呼吸できなくなる等、重要な副作用になるかもしれないので、止めて下さい。
- ・大丈夫ですが、その前に十分な水分摂取をお願いします。
- ・CT:できる限りお茶やお水で水分補給をしていただきたいです。
MRI:普段通りの飲食で問題ありません。
- ・アルコールは利尿作用があり血液中の造影剤濃度が上がる可能性があります。過度の飲酒は控えてください。水やお茶は水分制限がなければいつもより多めにとるようにして下さい。
- ・基本的には大丈夫です。但し、過度な飲酒は避けた方が良いかもしれません。
- ・お酒は控えてください。
- ・造影剤使用後「遅発性副作用」が問題となります。頭痛、吐き気、めまいなど、飲酒時と同じような症状です。安全性の面から検査当日は飲酒しないようお願い致します。
- ・この検査を受けた事による日常生活の制限はありませんので、普段通りの過ごし方で大丈夫です。
- ・お酒を飲むことで利尿作用が働き、脱水状態になりやすいのでお酒を飲むなら翌日以降にして下さい。
- ・普段の通りで大丈夫です。
- ・出来れば排出されるまでの1日(当日)は避けてもらいたい。(禁とは伝えていない)
- ・脱水のリスクがあるので、できれば飲まない方が良い。
- ・検査終了後は十分に水分を摂るようにして下さい。帰宅してから何らかの副作用が起きる可能性もあるため、できれば飲酒は避けた方がよいです。
- ・控えるようにしてください。

- ・今日はやめておきましょう。
- ・水分(水、お茶、ジュース)はなるべく多く取ってください。お酒はなるべく取らずに。
- ・特に制限はしておりませんが、水分補給を考えて水やお茶などをお勧めしています。
- ・アルコールによる脱水を避けるため、できるだけ飲酒は避けてください。
- ・なるべく控えていただく。
- ・ダメとは言いませんが、飲酒のみでなく、それ以上に水分摂取するように説明しています。
- ・造影剤による副作用出現の可能性があるので、控えることをお勧めします。医師の指示の範囲でお願いします。
- ・脱水は良くないので控えるように言います。

Q.12 造影剤はどれだけ入れても大丈夫

- ・一回の検査で使用する造影剤量は体重によって決まっているので、必要以上に多く入ることはありません。また、造影剤は体内に吸収されることはないので、複数回検査を受けても大丈夫です。
- ・当院では造影剤の量は体重比で決めているので、どれだけ入れても大丈夫というわけではありません。
- ・造影剤の量はある程度決まっています。
- ・検査ごとの量は決まっています。
- ・造影剤は体重によりほぼ決定されますので、体重60Kgの方だと約100ml使用で十分ですので、それ以上は使用しません。腎機能障害が高度の方は造影剤の検査は不向きです。
- ・決められた限度はありますが、今日はその3分の1くらいの量です。
- ・適量を使用させて下さい。
- ・CT:腎機能にもよりますが1日に大量の造影剤を使用すると一時的に腎臓の機能が低下したり最悪低下したまま腎機能が元の状態に戻らなくなってしまうです。
MRI:腎性全身性繊維症という病気を引き起こす可能性が高まってしまいます。
- ・造影剤は検査内容によって、また患者様の体重によってしゅうりょうが決められています。
- ・ダメです。
- ・決められた量のみ入れています。
- ・投与量は体に負担をかけないように最小限におさえています。
- ・体重に合わせて使用量を決めています。
- ・体重に合った量を入れることが望ましいです。
- ・1回の検査に必要な量しか使っていませんが、いろいろな病院で前に検査をした事を言わずに何回も受けてしまうと腎臓に悪い影響があります。
- ・体重に合わせた適量を使用します。
- ・CT:当院では一日に使う量を100～150mlにとどめてもらうようにしています。
MRI:基本的には体重と腎機能を確認したうえで量を調整しています。
- ・腎臓など体に負担のかかるお薬ですので、できるだけ少ない方が好ましいです。患者様の体格、検査内容等を考慮し必要最低限の量で検査をしています。
- ・大丈夫ではないので、各検査において適量を使用するようにしています。また、体格、年齢、性別等によっても使用量は変わります。

- ・造影剤による副作用発現率に差はありませんが、薬剤ですので必要以上の量は使いません。一般的には体重×5ml以下で300mlが上限となっています。
- ・副作用が少ないよう改良されていますが、腎機能の悪い方はうまく排泄されないで、検査前にeGFRという腎機能の数値を求め、適正量の造影剤を用います。
- ・腎機能にも影響されるので適量を入れています。造影剤を入れ過ぎても少なすぎても画像の写りに関わってくるので、造影剤の使用量は体重によって決められます。
- ・体重当たりの使用量が決まっているので、適量を注入します。
- ・各自適量があります。体重によって決められています。
- ・大量になると腎機能悪化のリスクがあります。
- ・腎臓に負担になるので、体重に合わせて量を決めている。
- ・当院では100mlまでです。
- ・造影剤は腎臓に負担をかけますので、検査に必要な量以上は使いません。使用する量は主に体重や撮影部位により決定しています。腎機能が規定以下の場合は、検査可能な範囲で減量する場合があります。
- ・検査の種類・体重によって決まっています。CTでは、だいたい100ml～150mlの間。MRIでは、10ml前後です。
- ・体重当たり決まっている量を入れます。
- ・ダメ
- ・造影剤はあくまでも検査のためだけの薬です。使いすぎると体に負担をかけるという報告があるため適量以上は使用しないようにしております。
- ・量に関しては体重等によって適切な量を入れるようにしているためご安心ください。
- ・患者さんの体重などによってその量は変わってきます。
- ・造影剤量は体重と腎臓の機能によって適切な量を使用します。
- ・体重や腎機能、撮影目的により使用する量が決まっています。量が多いからといってよく写るわけではありません。適量があります。
- ・良くないです。腎機能などを考慮して適正量を使用します。

Q.13 造影剤を使うとどうして熱くなるの

- ・造影剤を一気に注射することにより、体内浸透圧のバランスが乱れ、それを戻そうとして血管が拡張します。この現象によって全身の熱感がおこるとされています。ほとんどの患者さんが感じる現象で造影剤が全量入った後、時間が経つと熱感もおさまります。
- ・お薬を短時間で大量に入れるために体が反応して一時的に熱くなります。
- ・造影剤が急激に血管の中に入ってくるので、体が熱くなります。
- ・血管を流れる時の感じです。
- ・お薬が一気に注入されるため、血管の拡張が起こり熱感現象が起きているためです。時間が経つと元に戻ります。
- ・血管内でおこる生理的現象です。皆さん熱く感じると言います。
- ・生理反応です。
- ・熱さを感じるメカニズムは十分に明らかにされていませんが、造影剤の浸透圧に依存することが知られています。血管の進展(拡張)が関与するとも言われています。
- ・造影剤は約40℃に温められた状態で勢いよく体内に注入するため熱く感じます。

- ・ 温めてあるからです。
- ・ 一気に多くの量を入れるため、血管の拡張が起こりその刺激による正常な反応なので心配はいりません。
- ・ 造影剤を一気に注射するため血管の拡張が起こり、これによって熱感がおこる生理的な現象とされています。
- ・ 一気に注入しますので血管が拡張し、体内はバランスを保とうとして熱く感じます。熱感であって温度が高くなるわけではないです。など
- ・ 血管が造影剤の影響で拡張するので、血流が増え熱く感じます。
- ・ 一気に入るので、血管が拡張して熱くなります。誰でもなります。頭が熱い。お尻が熱い。いろいろです。
- ・ 血管拡張するため。
- ・ CT:造影剤が血管内を流れると血管が広がり、それによって体に熱感を感じるからです。MRI:MRIでは造影剤では熱くなりません。
- ・ 造影剤を血管の中に一気に注入するため、血管の拡張が起こります。これによって全身の熱感がおこる生理的な現象です。ほとんどの患者様が感じる現象です。造影剤が入った後は熱感もだんだんおさまっていくので、心配ありません。
- ・ 体内のバランスを保とうとして体が熱くなります。
- ・ 一気に造影剤を注入することによって、血管が広がり血行が良くなることで起こります。
- ・ 造影剤は浸透圧が高い為、血管内を通過する際に血管拡張などにより熱感が起こります。造影剤は尿として排泄されるので、一時的な熱感です。安心して下さい。その他、吐き気、息苦しさがある場合は言って下さい。
- ・ 血液と造影剤の濃度の差により、いつもより多くの液体が血管の中に流れ込む為、血管が広がりその為熱さを感じます。熱さは一過性のものなので、注入終了後5分程度で消失します。
- ・ 専用装置により圧力を加えて血管に注入する為、一時的に血管が拡張することにより熱く感じます。
- ・ 温めた造影剤を一気に注入するため、血管の拡張による全身の熱感を引き起こすものです。
- ・ 浸透圧の差によって、血管が拡張し熱く感じます。
- ・ 造影剤は粘度が高く、浸透圧の違いにより熱く感じる。
- ・ 血管の中の血液の濃さと造影剤の濃さが違う為、血管の中の濃度を保つために、血管の外から水分が移動しようとし、この時の刺激を熱いと感じます。また、急速に注入した時に血管が拡張することによるものとも言われています。
- ・ 造影剤は体とは、浸透圧が違うので、血管を刺激することで熱く感じます。
- ・ お薬の作用です。
- ・ 特にヨード剤
- ・ 造影剤は体液より浸透圧が高い薬です。使用すると血管が拡張することにより循環する血液が増え、お風呂に入った時のような温かさを感じます。
- ・ 勢いよく濃度の高い液体が入るため、多くの人が熱く感じます。
- ・ お薬が勢いよく入っていきますので、そのため熱く感じる事があります。
- ・ 身体成分と造影剤との濃度の違いで熱く感じる。
- ・ 造影剤注入による浸透圧の変化によるものです。MR造影剤は熱くなりません。

Q.14 造影剤を使用して検査をしますが、どんな目的で使用するのですか

- ・普通に撮影したのでは分からない血液の流れや、臓器にどのくらい血液が流れ込んでいるか、どのように流れ込んでいくかを調べるためです。
- ・悪い箇所があるかないか確認します。又、痛み(不調)の原因を見つけるために使います。
- ・写真を見やすくするためです。
- ・検査をより詳しく調べるためのものです。
- ・病気の有無や状態を薬を使用しないときと比べて詳しく検査します。
- ・単純CTでは見えない血液の流れや臓器への広がり等を観察することや時間経過の変化による病変の見え方の違いを検討するためです。
- ・その患者さんの検査目的にあわせて説明する。
- ・目的部位を分かりやすくする為に使用します。
- ・種々の病変に対する存在診断、質的診断の病期診断の決定を目的とします。造影剤を使用することにより、より詳細な情報を得ることができます。
- ・通常では見えない血液の流れや、血管の臓器への広がり等を見ることができます。また、経時的な変化を見ることで病変の質的診断ができます。
- ・検査をより分かりやすくするために用いる。
- ・画像にコントラストをつけて、造影剤を使う前の検査よりも情報量を増やすために使います。
- ・血管系・腫瘍系・炎症系等の正確な判断をする為です。
- ・「造影剤ってなんです？」と同じだと思うのですが？
- ・腫瘍など見たいところがよく写るようにするため。
- ・血管に入ると白く見えるので、血液が集まりやすい場所や早く熱くなるか、ゆっくりか等で病気の性質を調べます。
- ・体の中をよく見えるようにするために使います。腫瘍や血管がよく見えるようにするために使います。
- ・CT:造影剤を使うことでコントラストがはっきりとして使われない時よりもよく見えることがおおいからです。
MRI:より診断しやすくするためです。
- ・臓器、病変をより鮮明に確認するためです。
- ・体内の病変を見やすくするために用います。
- ・静脈に注射し、全身の血管や臓器に分布させる薬剤です。これにより病気の性質や血管や臓器が鮮明に描出されます。病気の状態をより正確にするために用いられます。
- ・病変と正常組織は血液の取り込まれ方が異なります。その違いを造影剤を用いることで画像化できます。
- ・造影剤を用いる事で用いない場所と比べ画像上、白と黒の濃度の変化を示し病変部の情報をより正確に把握できます。
- ・血管の内腔や血管の走行を見たり、臓器の染まり方により正常臓器と病変を区別したりする為に使用します。
- ・静脈性造影剤により脈管と脈管外構造の区別を明瞭にします。また、腫瘍性病変の血管支配がある場合、その様子を観るためです。
- ・血管や臓器を明瞭にして体の異常をわかりやすく、より詳しい情報を得るためです。
- ・造影剤が血液に交じって全身に広がるため、血管や血流の豊富な腫瘍などが診断しやすくなる。
- ・造影剤使用前後を比べて血管、臓器に何か異常がないか調べます。

- ・造影剤を静脈から注入すると血流に乗って全身へと運ばれて行きます。血管や、血管の富んだ炎症・腫瘍部分があればそこにより多くの造影剤が集まり、非造影では見えなかったものが所見として現れてきます。造影検査は画像コントラストを生み出し、多くの情報を引き出すことが可能です。
- ・より分かり易い画像にするためです。
- ・よく見るためです。
- ・単純CT(MRI)などよく見えなかったもの(病気)が所見として現れます。
- ・造影剤を使わない検査では観察しづらい血管の走行や病気の違いを見るために使用します。
- ・臓器や病変を見やすくし、診断しやすくするため。
- ・お体に異常があった場合に、画像でより見つけやすくするためです。
- ・診断したい所、見たい所をよく見えるようにするため。
- ・検査部位をより良く見えるようにするためです。
- ・血行動態を知るためです。

Q.15 先生やスタッフは防護衣を着ているのに、なぜ患者には着せてくれないの

- ・放射線の影響を考えなければならないほどの放射線は使用していませんし、必要最小限の範囲にしか照射しないので、防護衣の必要性はありません。しかし、我々医療スタッフは一日で数十件から多い時で数百件の検査を担当しますので、たとえ微量な放射線量でもゼロでない限り、法律によって被ばく線量限度が決められているので防護衣を着用しています。どうしても不安であるならば、お声をかけて頂ければ検査に支障をきたさない範囲で防護衣を着用して撮影いたします。
- ・防護衣を着用しての検査は正確な検査ができなくなるためです。
- ・防護衣を着ると検査部位が見えなくなってしまうからです。
- ・患者さんを診るためです。
- ・防護衣が検査部位と重なる場合：防護衣を着ていると画像が撮れないからです。
重ならない場合：検査は何回もあるので着用
- ・頭部の検査であればプロテクターを着ていただいても良いですが、胸や腹部検査はそのものが障害陰影になって検査できなくなってしまうので、そうしています。
- ・着せてさしあげます
- ・不安を感じる方には着せてます
- ・防護衣を着た状態で検査を行うと体の中をX線が通れずに体の中の情報が得られません。そうすると画像が作成できず被ばくだけ受けることになってしまいます。意味のない被ばくは防護することが取り扱いの原則になっています。
- ・医療従事者が業務の過程で受ける「職業被ばく」は線量限度が設けられているため、防護衣を使用します。健康被害の出るような大量の放射線を使用しているわけではありません
- ・時と場合によります。また若年者などメリット、デメリットの比較
- ・防護衣を着ている部分は放射線を通さないため、検査部位が見えなくなってしまうため、来て頂けません。
- ・撮影部位に影響のない部位なら着ますが、撮影部位に防護衣を着せたらX線を通さないため画像になりません。
- ・検査に支障(何の検査でしょう?)

- ・ 患者さんは撮影によって被ばくの症状が起こるほど、放射線の量を使っていないし、毎日行うことではないと思うので、大丈夫です。
- ・ 防護衣を着るとレントゲンをはね返してしまうので、写らなくなってしまいます。
- ・ 業務上、多くの被ばくをするため被ばく管理が必要。当該検査による被ばくでは体に害を及ぼすことはないため、必要ありません。
- ・ まず患者さんは被ばくをしても得られる画像診断が一番の大きなメリットであり被ばくもご自身の検査の時のみですが、スタッフたちは同じ仕事を続ける限り被ばくは増え続け、自身も画像診断を得られる訳ではないので、デメリットばかりなので被ばくを抑えるために防護衣を着ています。
- ・ 検査を受ける方の身体の周りに防護衣(鉛)があると検査の邪魔になってしまうからです。
一回の検査での被ばく量はごくわずかですが、一日に何度も検査を行うとそれだけ被ばく量が多くなります。
- ・ 私達は日常的に被ばくする危険性があり定められた線量限度を超えてしまう恐れがある為です。患者様にも必要な場合は防護衣を着けてもらっています。
- ・ 防護衣を着ていると写真に何も写らなくなるからです。
- ・ まず、患者様にX線を照射するのは「画像診断に必要であるため」ということをご理解ください。例えば胸の画像を撮影する際、胸を隠すような防護では胸のX線画像が撮影できないのです。ですから、関係のない生殖腺などをエプロン(鉛製)でしっかり防護しています。手、足などは放射線による影響が少ない部分です。甲状腺も放射線感受性が高いので、専用の防護具を用意しますので、安心して下さい。
- ・ 放射線を照射したところ以外はほぼ被ばくの影響はありません。
- ・ 患者さんには無駄な被ばくをさせない為に工夫をして撮影しています。防護衣は撮影の妨げになったり撮影範囲に重なってしまったりするので、必要な時には防護衣を着用してもらいます。スタッフ等は日々数多くの検査を行っているので、最小限の被ばくにする為に防護衣を着用しています。
- ・ 検査の内容にもよりますが、一般的に医師やスタッフは一日に何度も被ばくする事がありますので、被ばく軽減目的で防護衣を着用しております。
- ・ 検査部位以外に受ける放射線は弱いものなので、あまり心配はないのですが、スタッフは介助のために直接放射線を受けたり、受ける回数も多いため防護衣を着用しています。
- ・ X線は必要なところにしか照射しないので、プロテクターは必要ない。スタッフはたくさんの検査に携わるので、無駄な被ばくをしないように着けている。
- ・ 撮影部位、検査内容によって防護できる範囲があり、X線の照射部位に絞ってあるので心配はなく、使用可能であれば防護衣を着用して撮影、検査を出来れば行います。
- ・ 医療スタッフは放射線被ばくについて厳しく管理されています。患者さんから跳ね返る放射線によって被ばくをします。これを散乱線といいます。このため医療スタッフのみが防護衣を着ていますが、検査部位以外への散乱線がお気になる様でしたら患者さんにもお着せしています。
- ・ 撮影範囲に入っていない部位であれば、防護衣を着用していただきますが、今回は撮影範囲に入ってしまうので、着用できません。
- ・ 言われたことがないのでわかりません。目的部位にかかったら撮影できないし、プロテクターを着けたら被ばくが増える。「必要ないから」と回答すると思います。
- ・ 防護衣を患者さんに着せるとX線による画像が見えなくなる。DrやRT、Nsは何人も何人も患者さんに対応する為被ばくが増してしまうから。
- ・ 撮影する部位以外の被ばく量はとても少ないものです。また防護衣を着ることで体外に出るはずの放射線が反射し再度被ばくするかもしれないといった報告もあります。そのため患者さんには防護衣を使用していません。もちろん希望があれば使用いたします。
- ・ 被ばくする部位は検査で見たい部分に限局するように努めています。それ以上防護衣を着けると検査が意味を成さなくなってしまうので、着せていません。
- ・ スタッフは一日に何度も検査についたり、又は毎日検査についています。患者さんは何ヶ月かに一度受ける検査では防護の必要はありません。

- ・撮影部位によって、希望があれば着ていただくことも可能です。1回の検査の被ばくは低くても、私たちは1日に複数の検査に就くため、被ばく量が高くなるために着けています。
- ・先生やスタッフは1日何件も検査に携わり被ばくの機会が多いため着用しています。検査部位によっては防護衣を着ることで十分な検査が行えない場合があります。
- ・他にたくさん検査をしますから。

Q.16 検査の被ばくでがんになりますか

- ・放射線によるがんの発生が問題となるのは100ミリSvという量以上で、それ以下の放射線量では放射線の影響でがんになったのか、自然的にがんになったかは分からないのが現状です。また、当院の撮影において100mSvを超える線量を被ばくすることは無いので、がんが発生する心配はありません。
- ・検査での被ばくではがんになる可能性は限りなく低いです。
- ・0%ではありませんが、限りなく少ないです。
- ・全くないわけではないですが、殆どありません。
- ・殆どならないでしょうが、リスクはゼロではないと思われます。
- ・ここでは放射線を使用して検査をしていますが、量としては身体に影響が出る量よりもはるかに少ない量を使用していますので、安心して検査を受けて下さい。
- ・放射線被ばくでガンになるかもしれないという話を聞いたことはあるが、放射線が原因のガンを見たことは無い。
- ・低線量で撮影になりますので、心配しなくて大丈夫です。
- ・がんは受けた線量により、その発生確率が増加していきます。200mGy以上ではこの発生確率が直線的に増加することが確認されていますが、100mGy～200mGy未満ははっきりわかりません。そして50mGy以下は日常生活の中にあるがん因子の影響が大きく被ばくによってがんが増えるかどうかわかりません。そのくらい影響が少ないということです。診断で使用する放射線は100mGy未満ですので、今回の放射線被ばくによりがんが発生する確率は極めて低いと言えます。
- ・被曝による発がんは確率的影響として起こり得るものとされていますが、放射線による影響よりも日常生活の中にあるリスク(食生活など)の方がはるかに大きく、被ばくによる発がんは確認できないほど小さなものです。
- ・なし
- ・検査で受けるような量の放射線によるがんのリスクと他の要因での癌のリスクは区別できない程度ですし、他の要因に比べるとかなり低めです。
- ・一般的な検査被曝では癌になりません。被ばく線量によってはリスクはあります。
- ・いいえ
- ・なりません。
- ・当院で行う検査は被ばく量が少ないので、大丈夫です。(レントゲン、CT、泌尿器のみ核医学なし)
- ・可能性はゼロではありませんが、リスクとベネフィットを考えて必要な検査となります。
- ・地球上では常に自然からの放射線を浴びていますので、多少の検査の被ばくでがんになるとは言えないと思います。
- ・病院の検査で受けるような放射線の量はごくわずかですので。ご心配でしたら先生にお話ししてみてください。
- ・当院で検査の為に被ばくすることでがんになることはまずありません。
- ・医療で使用する通常の検査の被ばくでがんの発生が問題となる量を被ばくする事はありません。

- ・ 当院で使用しているX線装置ではがんにつながるような量のX線は使いません。安心して検査を受けて下さい。放射線はがんにつながる原因ではありますが、食事や生活習慣による発がんの方が問題です。
- ・ 被ばくをすれば必ずがんになるという訳ではありません。被ばくをしなかった場合に比べ発病の確率は高くなりますが、医療に使用している通常のX線撮影検査でがん発生が問題となる様な量のX線を受けることはありません。
- ・ 被曝の量は必要最小限に抑えていますので、検査の被ばくでがんにはなりません。
- ・ 検査で受ける放射線でがんになるかを実証する事は困難ですが、仮にリスクが増えたとしても他の要因によるがんリスクと比べて小さいと考えられています。
- ・ 長年、検査を受けた場合、放射線の影響でがんになりやすくなることはあるかもしれませんが、生活に関わる発がん物質（喫煙など）と同じようなリスクであり検査被曝だけでがんになる可能性は低いでしょう。
- ・ 数回の検査で受ける被ばくでがんを心配する必要はない。
- ・ 線量によって確率は高くなりますが、検査によってがんになる心配はありません。
- ・ がんになる可能性はゼロとは言えませんが、限りなくゼロに近いです。100mGyでの発がんのリスクは1.005(0.5%の増加)と言われています。一度の検査で100mGyを超える検査はほとんどありません。
- ・ がんになるかどうかは生活環境が大きな割合を占めています。放射線検査により受けた放射線のリスクは確認できないほどの小さいものなので、放射線の影響による発がんを心配するよりも、日常の生活環境を改善する方が有効です。
- ・ 考えなくていいぐらい低い確率でなるかもしれません。
- ・ 関係ない
- ・ 検査に使用する放射線は安全に使用できるレベルのものです。様々な報告の中でもCTの検査で一般の方の発がん率が上がった例はありません。
- ・ 絶対にないとは言えませんが、それを踏まえた上で検査するメリットが大きいので検査します。
- ・ お体に影響がない範囲で検査をしていますので大丈夫ですよ。
- ・ 誰もが必ずがんになるわけではありません。しかし被ばくをしなかった場合と比べると発病のリスクは高くなります。
- ・ 検査による被ばくは少ないため、これが原因でがんになる可能性は極めて低いです。
- ・ 可能性がゼロではないですが、限りなく少ないです。

Q.17 放射線の影響が子供や孫に遺伝することはないですか

- ・ 放射線による遺伝的影響はハエなどの動物実験では確認されていますが、人においては現在までに遺伝的影響が確認された事例はありません。
- ・ 検査での被ばくでは子供や子孫に遺伝する可能性は限りなく低いです。
- ・ それはありません。
- ・ 殆どありません。
- ・ 調査したところでは無いようです。
- ・ 一時的に150mGyの線量を受けると一時的不妊になるしきい線量ですが、一般的検査ではこの線量よりもはるかに少ない量ですので心配することはありません。
- ・ 遺伝すると聞いたことはありません。
- ・ 本人が受けた放射線の影響が子や孫に遺伝することは本人が遺伝的影響を受けた場合だけです。ただし人類では被ばくにより遺伝的影響が増えた事実は確認されていません。

- ・ 遺伝的影響は確率的影響として起こり得るものとされていますが、遺伝性疾患の自然発生頻度と比べると、被ばくによる遺伝的影響は確認ができないほど小さなものです。
- ・ なし
- ・ ありません。
- ・ 生殖細胞のDNAに傷害を引き起こす可能性可能性はあります。
- ・ はい。確率的影響があることを簡単に説明する。
- ・ ありません。
- ・ 原子爆弾のような大量の被ばくを妊娠中に受けていれば子供に問題が起きますが、当院の検査では問題ありません。
- ・ ありません。
- ・ 遺伝に関してはまず心配ないと言えます。
- ・ 大量に被ばくした場合影響する可能性はありますが、検査の被ばくは遺伝的な影響がある量には全く及びません。ご心配でしたら先生に相談してみてください。
- ・ 当院の検査の被ばくで、そのような事はまずありません。
- ・ 生殖細胞の被ばくでDNA傷害を引き起こすと傷害が次の世代へ「引き継がれますが、低線量では問題ありません。検査での被ばくによる遺伝的影響は心配ありません。生殖細胞ではなく体の被ばくでは全く問題ありません。
- ・ 女性では妊娠期(着床から胎児期)の被ばくが問題となります。各時期により胎児への影響が異なりますので、受精後16～25週は発育などに問題があることを覚えておきましょう。線量表をご覧ください。しかし、X線検査の線量では全く影響がないと思われます。
- ・ 遺伝的影響といいますが、放射線による遺伝への影響は人では確認されていません。
- ・ 適切な条件で撮影をしているので、遺伝するような影響が出るほどの強い放射線は使っていません。
- ・ 通常の診療での検査で受ける線量では、被曝部位が生殖腺であっても遺伝的な影響の発生を心配する必要はありません。
- ・ 遺伝的影響は生殖腺に大量の放射線を受けないと起こりません。通常の検査では心配ないでしょう。
- ・ 検査による被ばくで遺伝的な影響が起こることはないので心配なくて良い。
- ・ 遺伝することはありません。
- ・ 現時点で人での遺伝的影響は確認されていません。日本では広島原爆の被ばく者の方から放射線の遺伝の報告がないと聞いています。
- ・ 放射線診断による遺伝的影響の発生確率は、放射線以外が原因で自然発生的に起こる確率に比べるとほとんど問題にならない程小さいものです。
胎児が被ばくした場合は被ばく時の発生段階(週齢)によって、胎児に影響が出るが遺伝ではない。
- ・ まったくないとは言えませんが、考えなくていいぐらい低いです。
- ・ 被ばくによる遺伝的影響は確認されていない。
- ・ 現在まで子供や孫への遺伝的な障害は見つかっていませんのでご安心ください。
- ・ 放射線によってそのような影響はありますが、検査においてそこまでの線量は扱いません
- ・ お体に影響がない範囲で検査をしていますので大丈夫ですよ。

- ・ 卵巣や精巣などが高レベルの放射線を受けると生まれてくる子供に異常があったりと遺伝的影響が生じることがあります。しかし、放射線の影響と自然に突然変異が現れる確率確立と同じで区別は難しいです。
- ・ 放射線は長い時間体に留まることはないの、そのような事はありません。
- ・ 可能性がゼロではないですが、限りなく少ないです。

Q.18 妊娠前の放射線検査で不妊の心配はないですか

- ・ 放射線を浴びて不妊となるには男性で3.5～6Gy、女性で2.5～6Gyとなります。放射線検査で使用される放射線量はこの値の1000分の1以下となるので、不妊の心配はありません。
- ・ 放射線検査で不妊になる可能性は限りなく低いです。
- ・ 心配ないと思います。
- ・ 殆どありません。
- ・ 殆どありません。
- ・ 卵巣の壱時不妊は650～1500mGyの線量です。造影CTでの検査ではこの線量には遠く及びませんので心配いりません。
- ・ 不妊の心配はしていません。
- ・ 確かに放射線の影響で不妊が引き起こされることはありますが、それは大量に放射線被ばくを受けた場合であり診断で使用される放射線による被ばくでは起きませんので心配ないです。
- ・ 不妊は生殖腺が大量に被ばくした時に発生しますが、診断に使用する放射線検査でそのような大量の被ばくはあり得ません。
- ・ ない
- ・ 通常の検査での心配はありません。
- ・ 一般的な検査なら心配ないようです。
- ・ ない。
- ・ ありません。不妊になる程の放射線の量は使ってません。
- ・ 原子爆弾のような大量の被ばくを妊娠中に受けていれば子供に問題が起きますが、当院の検査では問題ありません。
- ・ ありません。
- ・ 心配ありません。
- ・ 検査で使用する放射線の量は人体にほとんど影響がないレベルです。心配ありません。どうしても不安でしたら先生に相談してみてください。
- ・ 検査の為の被ばくで不妊になることはまずありません。
- ・ ある線量以上で一時的な不妊が起こると言われています。CTではその1/10程度の被ばくですので不妊の心配はありません。一般撮影でははるかに少ない被ばくですので不妊になることはありません。
- ・ 不妊につきましては検査室入口に線量表がありますので、ご覧下さい。生殖腺にかなり高線量の被ばくをしない限り、起こりえないので安心して下さい。女性は650mGy以上で一時的に不妊リスクがあります。
- ・ かなり高い放射線を浴びない限り一時的であっても不妊になることはありません。一定の線量を越えて浴びない限り不妊にはなりません。
- ・ 適切な条件で撮影をしているので、不妊の心配はありません。

- ・ 通常の検査で受けるX線の量では被ばく部位が生殖腺であっても不妊を心配する必要はありません。
- ・ 不妊は短期間に大量の放射線を生殖腺に受けた場合になることがあります、通常の検査では心配ないでしょう。
- ・ 検査による生殖腺への被ばくは、不妊を起こす被ばく量に比べてごくわずかなので心配ない。
- ・ 第線量の場合考えられますが、検査によって不妊になる心配はありません。
- ・ 検査で被ばくする線量は不妊となる線量よりも低いいため不妊になる心配はありません。
男 一時不妊 0.15Gy 永久不妊 3.5～6Gy
女 一時不妊 0.65から1.5Gy 永久不妊 2.5～6Gy
- ・ 生殖腺部位（腹部など）に直接放射線が当たる場合には考える必要がありますが、一般的なX線検査では、不妊になるような被ばくを受けることはない、妊娠しにくくなるということはありません。
- ・ ないです。
- ・ 放射線の量はとても少ないので医療に使用する量では心配ない。
- ・ 検査で使用する放射線で不妊の心配はございません。使用される量は不妊を起こすと考えられている量よりはるかに少ないものです。もしご希望があれば実際に受けるはずの量も計算できますので教えてください。
- ・ 放射線によってそのような影響はありますが、検査においてそこまでの線量は扱いません
- ・ 妊娠に関して影響がでるような検査は行っていないので心配なくて大丈夫です。
- ・ かなり高い放射線被ばくをしない限り大丈夫です。
- ・ 被ばく量が少ないので体への影響はありません。
- ・ 当院の検査では心配ございません。

Q.19 妊娠中に放射線検査を受けてしまいましたが、お腹の赤ちゃんに影響はないですか？

中絶の心配はありますか？

- ・ 胎児に放射線の影響が心配される放射線被ばく量は100mGy以上で、更に流産が心配されるのは受精から15日程度の期間となります。
放射線検査で使用する放射線量はこの値の100分の1程度です、1番被ばくの多い骨盤部CTでも平均線量で約25mGyですので、心配はありません。
- ・ お腹の赤ちゃんへの影響は少ないと思います。中絶の心配は検査による影響は少ないと思います。
- ・ 0%ではありませんが、統計学的には問題はないと思います。
- ・ 影響はないわけではないので、産科の先生と相談しましょう
- ・ 検査の場合は無いと思われます。
- ・ 胎児の被ばくが100mGy以下であれば問題ないと確認されています。例えば胸部X線で0.01mGy、腹部CTで10mGy程度ですので心配ありません。
- ・ どの様な心配をしているのでしょうか？中絶は心配なので、中絶はしないでくださいという。
- ・ 問診の時に妊娠されている方は検査しないことになってます。

- ・ 胎児の形態異常が起こるのは受精2～8週の器官形成期に細胞の成長を阻害するほどの被ばくを受けた場合で少しの被ばくでは発生せず胎児が100mGy以上被ばくした場合に問題となります。また、遺伝的影響の可能性は確率で考えるのでゼロではありませんが、人類では被ばくにより遺伝的影響が増えた事実は確認されていません。中絶に関してはICRPの勧告により100mGy以下の胎児線量では放射線リスクから判断しては正当化されない。とされていますので、診断で使用されている放射線被ばくでは中絶の心配はないと思います。
- ・ どの様な検査を受けたのか確認が必要です。胎児の被ばく線量を正確に把握することは困難ですが、しきい線量である100mSvを超えるかが目安になります。
- ・ 検査の内容による。
- ・ 赤ちゃんに影響が出る可能性のある最低の被ばく量を通常のX線検査やCT検査で上回ることはないのでX線被ばくだけをもって中絶を行う必要はないです。
- ・ 妊娠何週目か確認し、被ばく線量によって影響があります。
- ・ 線量は？
- ・ 時期によります。
- ・ 当院で行っている胸、腹部レントゲンでは大丈夫です。CT造影を受けていたら産婦人科に相談して下さい。
- ・ 医療被ばくの線量では影響はない。しきい値を超えない。中絶は必要ない。
- ・ 母体が放射線を浴びればお腹の赤ちゃんも被ばくしますが、その量はごくわずかなので心配ないと思います。
- ・ 検査で使用する放射線の量は人体にほとんど影響がないレベルです。心配ありません。どうしても不安でしたら先生に相談してみてください。
- ・ 検査の為の被ばくで胎児に何らかの影響が出ることはまずありません
- ・ 赤ちゃんへの被ばくが100mGy以下であれば問題ありません。一般撮影の腹部の撮影では1.4mGy程度ではるかに少ない線量なので心配はありません。
- ・ 胎児への影響があるのは一定の線量を上回って被ばくした場合です。この量を「しきい値」といいますが、X線検査で使用するX線はこの値よりかなり低いので、影響はありません。安心して下さい。
- ・ ある一定の放射線の量を越えなければ影響ありません。放射線検査を受けたからといって妊娠中絶をする必要はありません。(あえて被ばくという言葉は使わない)
- ・ どうしても検査が必要である場合、妊娠中でも放射線検査を受けなければならない時もあります。その際は被ばくは必要最小限に抑えていますので、赤ちゃんへの影響はほぼありません。
- ・ 通常の検査では胎児に影響の出る線量は使用しませんので、赤ちゃんの形態異常等が発生することは考えられません。中絶の心配はありません。
- ・ 妊娠中に複数回の検査を受け大量の放射線を生殖腺に直接受けた場合、胎児へ影響することがありますが、通常の検査では心配ないでしょう。
- ・ 一回のCT検査で影響の心配はない。影響が発生するのは100mGy以上で1回のCT検査では20mGy程度です。
- ・ 妊娠の時期、線量によって異なってきますが、検査による影響は心配ありません。
- ・ 受けた検査内容、妊娠の時期にもよります。100mGy以下の線量であれば問題ありません。通常の放射線検査であればそのような線量に達することはまれであり影響がでない。また、中絶の心配もありません。
- ・ 通常の放射線検査では、お腹の赤ちゃんに影響がある線量を超えることはないので、中絶の心配はありません。
- ・ 依頼医と話をしてもらう。技師側では対応しない。

- ・医療の放射線量は微量で比較的安全。
- ・通常の検査で使う放射線は影響が出ると言われている量よりとても少ないものです。お腹の赤ちゃんに影響を起こすことはないと考えられます。ご希望があればどのくらいの放射線が当たったかをお調べいたします。
- ・可能性はありますので、検査後速やかに産婦人科に行くことをお勧めします。
- ・100%影響がないとは言い切れませんが、生活習慣や心的要因にも左右されることなので、必ずしも放射線の影響と考えなくて大丈夫です。
- ・検査による被ばくが原因で胎児に形態異常が出ることはないと考えられます。だから中絶する必要はありません。
(通常、検査による被ばくが少なからずあるため、被ばくよりもメリットが上回ったと判断した時に検査を行っています。)
- ・検査の種類、部位を確認し、それに応じた説明をしています。MRIに関しては胎児に影響はないと言われています。この検査による中絶の可能性はほとんどありません。
- ・100mGy以下での影響の根拠はありません。当院の検査では超えません。

Q.20 子供が放射線検査を受けました。影響はないでしょうか

- ・一般に子供は大人より放射線による身体的影響(放射線感受性)が出やすい(高い)と言われていますが、あくまでも動物実験から予想される仮定の話で人に対しては確実なことは解っていません。ですが、念のため余計な部位に放射線が当たらないよう範囲は最小限にしていますし、体は大人より小さいのでその分使用する放射線量も少なくしていますので、心配する必要はありません。
- ・検査による影響は限りなく低いと考えられます。
- ・心配ないと思います。
- ・殆どありません。
- ・検査は受けても問題ははありません。
- ・子供さんの放射線への感受性は大人よりも高いと言われていますが、当然体が小さい分線量も少なくなっていますので、影響が発生したという報告はありません。
- ・どのような影響が心配なのでしょう？
- ・低線量での撮影になりますので心配はないと思います。
- ・診断に用いた放射線によって小児の発がんが増えた事例は確認されていません。また、子供の成長を阻害するような大量の放射線は診断では用いませので心配しなくても大丈夫です。
- ・どのような検査を受けたのか確認が必要です。一般的な診断で使用する放射線検査で健康影響が出ることはありません。
- ・何の検査ですか？ ほぼないと思いますが、心配なら担当医へ確認してもらおう。
- ・通常の検査で影響が出ることはありません。
- ・検査の種類によります。一般撮影では影響ないでしょう。
- ・ない。
- ・ありません。
- ・当院で行っている検査なら大丈夫です。
- ・ありません。

- ・ 子供の場合は放射線の量を少なく調整して検査を行っていますので、影響の心配もないと思います。
- ・ 身体が大人より小さい分使用する放射線の量も少なくなります。心配ありません。
- ・ お子さんは大人よりも放射線の感受性は高いですが、影響が出るほどの被ばくをすることはありません。
- ・ 身体が大人より小さいので、撮影に必要なX線量も少なくなります。X線による影響を心配する必要はありません。
- ・ 放射線障害はある一定の量を被曝しない限り起こりません。X線検査で使用するのは、その量よりもかなり低い線量ですので、安心して検査を受けて下さい。子供の線量は大人よりさらに低い量です。
- ・ 身体が成人より小さいので、その分撮影に必要なX線の量も少なくなりますので検査で使用する放射線量では大人同様X線による影響を心配する必要はないと言われています。
- ・ 影響が出るほどの強い放射線は使っていません。また、必要に応じてきちんと防護も行っています。
- ・ 必要以上の被ばくをせぬよう各施設で工夫して放射線防護に取り組んでいるので心配ないです。
- ・ 大人の方と同じく、大量の放射線を受け続けた場合、影響することはあるかもしれませんが、通常の検査では影響はないと思います。また、子供は大人よりも少ない放射線で検査を行っています。
- ・ 影響を心配する必要はない。検査を受けることによる利益の方がはるかに大きいので、安心して下さい。
- ・ 検査による影響は心配ありません。
- ・ お子様が検査をする場合は必要最小限の放射線で検査をするよう心がけていますので、影響はないと考えてもらってよいと思います。
- ・ なるべく少ない線量で撮影できるように工夫しているので大丈夫です。
- ・ 検査の内容がこちらではわからないので、お子さんを検査したところで聞いてください。
- ・ 一回のX線検査では比較的安全また、手とか足ではなおのこと。
- ・ 通常の検査で使う放射線は影響が出ると言われている量よりとても少ないものです。お子様に影響を起こすことはないと考えられます。ご希望があればどのくらいの放射線が当たったかをお調べいたします。
- ・ 無駄な被ばくが無いよう防護していますのでご安心ください。
- ・ お子様には特に必要最低限内で検査を行うよう努めていますので、ご心配されなくて大丈夫ですよ。
- ・ 子供の検査の際は、放射線の条件を調整し線量を少なくして撮影するようにしています。
- ・ 被ばく量が少ないため、影響はありません。
- ・ 適切な線量で影響はありません。

Q.21 短期間に何回も検査を受けて大丈夫ですか

- ・ 放射線は人体に残留することはありませんので、放射線検査において問題となるのは一度に浴びる放射線量となります。線量が多いほど細胞へのダメージは多くなりますが、放射線検査において使用する放射線量は微量なので、検査回数を問題視する必要は特にありません。
- ・ 回数にも検査にもよりますが、基本的には影響は少ないと思います。

- ・ 心配ないと思います。
- ・ 殆どありません。多数回の検査での被ばく量は考慮しています。
- ・ 問題は無いと思われます。
- ・ 放射線の影響が蓄積されるわけではありませんので、障害発生につながることもありません。
- ・ 全て聞いて大丈夫ですと答える。
- ・ 被ばく線量の表を渡して理解してもらいます。
- ・ 診断で使用するレベルの放射線被ばくでは大丈夫です。
健康障害が起きた事例は確認されていません。必要な検査に制限をすることにより診断や治療にも制限が加わる方がマイナスとなります。
- ・ どの様な検査を何回受けたのか確認が必要です。被ばくのリスクよりも検査をしないこと
のリスクが大きい場合のみ検査をしていますので、恐がらずに検査を受けることをお勧め
します。
- ・ 担当医の確認の下で。
- ・ 影響が蓄積されるわけではないため大丈夫です。
- ・ 検査内容によります。放射線のリスクを考え検査の必要性を説明する。
- ・ はい。
- ・ 大丈夫です。
- ・ 胸、腹部レントゲンなら大丈夫。CTは被ばくが多めですが他の病院でも同じ検査をだまっ
て受けていなければOKです。
- ・ 大丈夫です。体に影響を及ぼす線量ではありません。
- ・ 何回か検査を受けた位では一年間に浴びる自然からの放射線の量を超える事はないと
思いますので、大丈夫だと思います。
- ・ 当院では必要最低限の被ばくで検査を行うよう努めております。検査で体に影響が出る
ことはまずありませんが、他院で撮影した場合などあれば、先生にご確認下さい。
- ・ 大丈夫です。
- ・ 通常の検査で受けるX線量は身体的症状が出る線量よりもはるかに少ない量のため問
題ありません。
- ・ 手首などの骨折で週1回のペースで確認の為のX線撮影をされる場合があります。1回の
線量もかなり低く放射線障害が起こりえない量ですので、安心して下さい。骨のズレがな
いか？を確認する為の大切な検査なのです。
- ・ 基本、大丈夫です。放射線科の検査自体患者様の得られる利益と被ばくというリスクを比
べて利益の方が上回る事を前提に検査が行われています。また、撮影する部位が違け
れば被ばくを心配する必要はありません。それでも心配な場合は医師とよく相談して検査
を受けて下さい。
- ・ 適切な条件で撮影しているので、問題はありますが、他の医療機関に受診する際は検
査既往歴をお伝え下さい。
- ・ 回数についての医療被ばくを心配されるのであれば、それは大丈夫です。海外への旅行
をする時に利用する飛行機に乗っても被ばくするんです。検査することで医療行為のメ
リットが増えます。
- ・ 必要な検査であれば受けた方が良いです。不妊以外では検査で使用する放射線の量で
あれば短期間でも時間を空けても変わりません。通常の検査では心配ないでしょう。
- ・ 放射線によるリスクより検査による利益の方が大きい場合にしか検査はしませんので、
安心して下さい。

- ・ 1回に大線量ではなく期間が空いてるので、問題ありません。
- ・ 短期間に何回も検査するのはあまり好ましくありませんが、被ばくの影響よりも、検査により得られる情報のほうが利益と判断しての検査なので検査を受けた方が良いと思います。医師に検査を受ける必要性を十分に説明してもらい納得したうえで検査を受けて下さい。
- ・ 通常の放射線検査1回で受ける放射線量は少なく、健康に影響を及ぼすことはほとんどありません。また、定期的に受ける場合も、期間があくことで体の中では、放射線の影響に対する修復効果が期待できるため、毎回の線量を加算して心配することはありません。
- ・ 必要な検査なので何回もしていますよ。依頼医に必要な検査である説明をしてもらう。
- ・ CTですか？MRIですか？当院では18週を過ぎてからです。
- ・ ほとんどの場合、問題はないと考えられます。正確にお答えするためにはどの時期にどのくらい放射線を受けたかをお教えてください。お調べいたします。
- ・ 検査にもよりますが、被ばく量を考えたうえでDrも検査を依頼してますのでご安心ください。
- ・ 1回1回の検査がお体にほとんど影響がない範囲で検査をしていますので、何回か検査をされてもお体には影響が出ませんので大丈夫ですよ。
- ・ 検査の内容にもよりますが、検査で受ける被ばくのデメリットよりも検査で得られる情報の上回っている場合のみ検査が行われているはずなので、心配しないでください。
- ・ 検査を何回も受けた事でがんになる可能性は極めて低いです。それよりも検査を受けずに病気が分からないことの方が問題ではないでしょうか。
- ・ 適切な線量で影響はありません。

その他回答施設にてよくある質問と回答例

Q. 歯医者さんで歯のX線撮影を歯科衛生士さんが行っていました。衛生士さんもX線撮影しても良いのでしょうか？

A. 病院、歯科医院でX線撮影できるのは医師、歯科医師、診療放射線技師のみです。ですが、撮影の為に準備(フィルムを口内に固定、エプロン着用など)は歯科衛生士さんも可能です。X線は歯科医師が照射していると思いますので、安心して下さい。

Q. CTとMRIはどう違うんですか？

A. CT検査はX線を使いMRI検査は磁石と電波を使って体の中を撮ります。疾患の種類や診断・治療目的によって使い分けられます。

Q. 癌があればどの部位でも分かるのですか？

A. 見つけやすい部位もありますが、がんの種類、大きさ形によって見つけるのが困難な場合もあります。その為、CTやMRI以外の検査も含めて診断されますが、CT、MRIは適正な撮影技術や知識をもって最良な画像を提供することで発見率の向上に努めています。

Q. 造影前のコーヒーは飲んでも大丈夫ですか？

A. 水、お茶、スポーツドリンクを勧めている。コーヒーは控えてもらう。

Q. 「前の病院で昨日も検査したのに今日も撮るんですか？」(当院は紹介からの入院が多いので)

A. 機械が違っていたり、検査の仕方が違っていることも多いので必要になります。

回答施設からのご意見

- ・ どのような質問であっても答えが決まった質問でも患者の言葉を全て聞くことが大切です。患者の求める答えと違う事を話すことになっても会話の中でこちらの意図が伝われば不安が少なくなることもあります。患者の側に立って一緒に悩んでみてもよいと思います。間違った答えを言うのは良くありませんが、正しいことを言うのが不安の解消になるとも限らず。
- ・ 被曝質問について：検査種、部位、回数などにより多少変わると思います。

回答施設からの質問に対する回答

Q.1 検査の被ばく量はどのくらいですか？（各施設の説明や対応方法を知りたい）

- ・ 講座の中では明確な回答例を得られませんでした。アンケート結果の中では線量表を作成し提示しているようです。詳しく知りたい場合は少し待って頂いて計算しているようです。

Q.2 「なぜ患者には防護衣を着せてくれないの？」という質問に対して他の施設様でどの様に答えているのか、とても興味があり教えて頂きたいです。

- ・ 回答例をご参照ください

Q.3 放射線の被ばくはどれくらいですか？何mSv、何Bqですか？と聞かれた場合、正直に答えますか？忙しい状況であればどう対応しますか？

- ・ 講座の中では明確な回答例を得られませんでした。アンケート結果の中では線量表を作成し提示しているようです。詳しく知りたい場合は少し待って頂いて計算しているようです。

Q.4 ボタン、入れ歯等、他の施設では外さなかったのに、写真にも写らなかったのになぜここでは外さないといけないのか？と言われた場合どう答えますか？

- ・ 同じ装置で同じ方法で同じ部位を撮影するのであれば、外さなくても大丈夫かもしれませんが、他の施設でどのように撮影したのか分かりませんし、写っていても再撮影をしなかったかもしれませんので、当院では外していただけないでしょうか。

Q.5 小児胸部一般撮影にて防護エプロンをなぜつけないのですか？（なぜつけるのですか）

- ・ 講座の中では明確な回答例はでませんでした。Q.20回答例を参考にいただければと思います。

Q.6 MRIの騒音について短くて患者が分かりやすい説明はないか

- ・ 画像を得るのに体に電波を当てますが、その時装置が振動して音が出ます。
- ・ 磁場の中で装置に電気が流れると装置（中のコイル）が振動して音が出ます。

この度は第2回第5地区卒後教育講座アンケートにご協力いただきまして、誠にありがとうございました。

